

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770151

研究課題名(和文) 2次述語の類型論

研究課題名(英文) Typological Studies in Secondary Predication

研究代表者

芝垣 亮介 (Shibagaki, Ryosuke)

南山大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70631860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：3年間にわたる本研究では、報告者は2種類ある述語(1次述語と2次述語)のうちの2次述語を、英語、日本語、中国語、モンゴル語、朝鮮語において理論分析した。その後、各言語におけるデータおよび分析結果を比較し、人間にとって2次述語とは何か、また人間は2次述語を通し何を認識しているのかを説明した。研究成果としては論文2点と著書1点の刊行に至った。

研究成果の概要(英文)：In this 3-year research project, I investigated the secondary predication in such languages as English, Japanese, Chinese and Mongolian. Then I compared the data and result with each other, which deduced what secondary predication is like and what we human beings recognise through secondary predication. As for the research achievements, I published two journal papers and one book in this topic.

研究分野：言語学

キーワード：意味論

1. 研究開始当初の背景

(1) 叙述研究は、国外では1980年代以降 MIT Lexicon Project(MIT 語彙プロジェクト)が世界をリードする存在であった。また、1993年にスタンフォード大学の Beth Levin 教授によって発表された「English Verb Classes and Alternatives」は叙述研究を大きく進歩させただけでなく世界中の同分野の研究者に刺激を与えた。

(2) これらの国外の動きを受け、国内でも様々な活動が行われてきた。最も著名な活動としては1994年以来影山太郎教授(国立国語研究所所長)が主催する KLP(関西レキシコン(語彙)プロジェクト)がある。ここでは語意味論の立場から叙述研究の議論が盛んに行われており、日本における叙述研究の中心的な位置付けといえる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は理論言語学の中でも語彙意味論、統語論の両分野において、5つの言語(中国語、モンゴル語、朝鮮語、日本語、英語)における2次述語を分析することを目的とする。2次述語とは、例えば「John talked himself hoarse.」という文における hoarse のことである。この文では talk が自動詞のため、hoarse がなければ文が非文となり、himself が文中に存在できるのは hoarse が認可しているからと考えられ、つまり hoarse が述語として機能していることがわかる。2次述語は自然言語の産物であり非常に多くの言語に存在している。先行研究も豊富にあり、理論言語学の中でも比較的着目されてきた事象と言ってさしつかえないと考えられる。

(2) 上記の五言語における2次述語を、英語を中心に発展した西欧の言語理論をそのまま当てはめるのではなく、まず各言語特有の形態的及び統語的特長を考慮しながら観察・分析し、その上で他言語のものと比較し、項構造、述語自体のもつ語彙情報(アスペクトの有無等)、そして叙述の成立条件における共通点と相違点を正確に把握することである。

3. 研究の方法

(1) 研究の目的を達成するための方法論として、先行研究に多くあるような分析の進んでいる一部の言語の研究に頼るのではなく、様々な言語において理論的に解析し比較研究を行う。対象言語は、日本語、英語、中国語、モンゴル語、朝鮮語とする。この5言語には SVO 型と SOV 型が混在しており(2次述語の振る舞いは SVO 言語と SOV 言語の間に差異があると予測されている(cf.影山 2001))。

(2) モンゴル語を核として、日本語、朝鮮語と比較することにより、幅広い意味でのアルタイ語の特徴にも迫れるため、意義深

い結果が得られると考える。かつ上記の5言語においては応募者がデータ収集および理論的議論のできる環境が準備できている。対象言語が多岐に渡るため、研究は3年計画とする。

4. 研究成果

(1) 当初の研究目的として多言語(中国語、モンゴル語、朝鮮語、日本語、英語)における叙述分析をあげたが、著しい成果があがったのは日本語、モンゴル語においてであった。この2言語については論文を公刊した。日本語については国内の学会誌から論文2点を発表するという形で成果を残した。また、モンゴル語、英語、日本語をメインとした2次述語の理論的比較分析も行い、この研究についてはヨーロッパの出版社から著書を発表するに至った。このような成果物をもって、本研究費による3年間の研究は、国内外において一定程度のインパクトを残せたと考えている。

(2) 成果は具体的には叙述の認識と時制の関係が述語の統語構造に基づいていることを示したことである。これは2013年に行われた学会「Towards a Theory of Syntactic Variation」において Shibagaki & Kishimoto で発表した口頭発表「Parametric View on Tense Projection in Secondary Predication」の内容をもとに、モンゴル語のデータを取り直し、英語、日本語における2次述語との比較研究をしたものである。

理論的には、2次述語のイベントの発生を人間が認識するメカニズムを提案した。特定の言語において、2次述語は文の中にあるどれかの時制表現に依存すると述べた。その「どれかの時制」とは、2次述語内にある時制(2次述語が TP の時)でもよいし、主節の時制(2次述語が SC であり時制を含まない)である。つまり、各言語の2次述語の節としてのサイズを理論的に分析すれば、その2次述語が結果を表すことが可能なのか、それとも描写を表すことしかできないのかが理解できるというものである。

具体的には以下の通りである。全ての言語は2タイプにわかれる。日本語や英語は、2次述語のイベントの発生するタイミングをコンテキストやその他の文法事項(助詞など)から読み取る。一方モンゴル語(や韓国語)は前述のように、2次述語の発生するタイミングを認識するのに文中の時制表現に依存する必要がある。よって以下ようになる。

	2次述語	SC	結果構文
日本語・英語	SC		OK
モンゴル語	TP/SC		×

結果構文の時、結果2次述語が表すイベント

は本動詞（1次述語）が表すイベントの発生時とは異なるタイミングで発生する。この発生時を理解するのに、英語や日本語は時制表現がいらぬのだが、モンゴル語は時制表現を必要とする。よって、モンゴル語において、述語が TP の時はその節内に時制表現が存在するので、その時制表現次第で描写構文でも結果構文でも生成できるのだが、結果述語が SC の時は、その節内に時制表現がないので、そのイベントの発生時を認識するために、文中に唯一ある時制表現である、主節の時制表現を頼る必要がある。この状況では、主節も2次述語の節も共に一つの時制表現（主節の時制表現）を利用しているので、主節と2次述語の節の表すイベントは同一のタイミングで発生するしかない。つまり、この状況では、描写構文（ある項が2次述語の状態の時に主節のイベントが発生する）の解釈しか読めない。

一方、英語は完全にコンテキストに依存しているので、状況が整えば、ある文から結果構文と描写構文の両方の意味をとることが可能となるという理論的予測がたち、実際にそうであることが確認されている。それは例えば、John hit Mary sober. という文において、a. ジョンがシラフの時にメアリーを叩いた（描写構文） b. しらふのメアリーをジョンが叩いた（描写構文） c. ジョンがメアリーを叩いて、結果メアリーが目を覚ました（結果構文）の3通りの解釈が可能となる。

日本語は英語と同タイプと考えられ、TP タイプの結果構文が存在しないのだが、解釈自体は、助詞の意味に依存しており、コンテキストで自由に描写構文と結果構文の間を行き来することはできない。

上記の研究結果は多言語にわたる2次述語を同じ観点から分析しその結果を比較したことによって初めて明らかにされえたものである。本研究費をもとに、3年間という時間の猶予があってようやく行うことのできた研究であると考えている。

派生的な研究成果ではあったが、日本語の2次述語を分析する上で避けられなかったのが助詞の振る舞いや、「～ないで・～なくて」というような表現であった。助詞は前述の通り、日本語の2次述語の意味を決定するものであり、本研究の核をなすものであった。また「～ないで・～なくて」はその意味上、同時あるいは事後に起こっている2つのイベントをつなぐ接続表現であり、それはまさに描写構文や結果構文と意味的に関連のあるものであった。意味的に類似するが、統語的に全くことなる表現が存在する理由を考えるとこの研究は始まり、これも一つの論文として研究成果を残すに至った。

(3) 予測していなかった事態ということではないのだが、節のサイズを理論分析する上で、主語を節内で表せられるかという点は常に気にしており、その点において、中国語の雨降り構文にであった。これについては台湾に在籍している王氏からデータを集めているのだが、1984年のJ.Huang以来アップデートはなく、いわゆるコントロール構文（近年の研究ではコントロールも移動現象として扱われているがここでは深入りしない）では説明し切れないデータも存在し、今後の研究課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

Ryosuke Shibagaki, Between Language Education and Linguistic Theory: Suffixes and their Semantic Distribution, 言語文化学会論集第46号、査読有、2017、

Ryosuke Shibagaki, Prepositions and Particles in English Education, 言語文化学会論集第44号、査読有、2015、

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

Ryosuke Shibagaki, Grammatical Expression of Tense and its Interpretation in Secondary Predication, in Understanding Predication (Studies in Philosophy of Language and Linguistics Vol.9), 査読有、294p, Peter Lang Publication

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

芝垣 亮介 (SHIBAGAKI, Ryosuke)

南山大学・外国語学部英米学科・准教授

研究者番号：70631860

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )